

緒 言

多少の誤解を恐れずに語れば、この1年はまさに東北大震災と共に始まり、その大震災と共にまだ右往左往している、というのが実感であろう。私事で恐縮です。昨年の3.11はドクターの学生の論文審査を外部の大学人に依頼するため、浜松にいた。新幹線で帰ろうとしたのだが、がなりたてる駅員の意味不明語のなか、かろうじて上り新幹線は運休という言葉が分かった。

死の恐怖に限らず、本人の体験や経験を他の人間が軽はずみに代わってすることはできない。1954年の9月に起きた青函連絡船『洞爺丸』の座礁、転覆沈没事故は、幼い子供の記憶にも深くとどまっている。その洞爺丸関連のエピソードが大人になってからある雑誌に紹介された。それは救命ボートに必死の思いで乗った白人の牧師が、ボートのへりにしがみついている母子づれを助けるために自らがボートから海に下り、母子づれをボートに引き上げ命を落としたという話である。自分の命と引き替えに助けられた日本人の母子が、しばらく時間がたってからようやく口を開いて、ことの真相を語った。

欲深い利己的な性質を強くもつ筆者にはとうていできない行為である。せいぜいできることといえば、人間行動の賢さや愚かさを共有化し、生きていく道の確かな方向性を手引きする程度ではないか、と思考している。

第4号を迎えた『マネジメント・ジャーナル』は、決して新奇性に富んではないけれども、多少の話題性、新規性はあるであろうという意味で、“リスクマネジメント”を統一論題にした。安全の反対概念であるキケン関連用語には、crisis, danger, riskの3つの用語がある。まずcrisisは、oil crisis や money crisis に代表されるように、どちらかという自分とは直接関係がなく責任は負わないで済むような雰囲気がありながら、結果として直接身にふりかかってくるキキ（危機）を意味することが多いようである。

次のdangerは、わがキャンパスの山道近くにある立て看板の標語にもありそうな“危ない、近寄るな！！まむしに注意！！”の注意やキケン（危険）に代表される。自分の意思で近づかなければ安全は確保できる。つまり自分の意思や責任の範囲内で判断することが求められる。

最後のriskは賭け事や株式投資、商品相場のように、すべて自分の判断でリスクをとることが求められる。Take your own risk！！のように、誰かにすぎることはできない。riskに独自の日本語を探すのは、容易ではない。辞書にはキキやキケンの他にポウケン（冒険）がある。つまりriskには主体責任を主、客体責任を副とする、包含的、包括的な思考がその根底に流れているように思われる。

うんちくはその辺りにして、特集論題の「今後のリスクマネジメントのあり方」に沿った論文として、5本の寄稿をいただいた。5人の執筆者はそれぞれリスクマネジメントの領域での第一人者の方々である。企画者の一人として喜びも一入（ひとしお）である。5本の論文は、東日本大震災あるいは3.11を意識したもの2本、リスクマネジメント一般を扱ったもの3本であった。分布もバランスがとれていて心地よかった。

実証研究に相当する2本を個別にみってみると、まず太田 三郎論文は、倒産および再生の実態分析を主としている。データや事例をふんだんに使用しながら、東日本大震災の特徴抽出を試みる。

つぎに亀井 克之論文は中小企業に特化しながらも経営行動の分断を正面からとりあげる。その影響側面を7多角性から分析し、同時にその修復活動を展開する。

一方、一般理論の深化を試みる3論文の構想力を以下でみてみよう。まず植藤 正志論文は、危機の見えざる要因を組織文化に集約し、その要因の“見える化”を試みる。そのヒントを組織構成員の信頼関係に見いだす。つぎに田尾 啓一論文では、リスクマネジメントと経営の持続可能性との関係をテーマにする。きわめてオーソドックスに概念規定、フレームワーク、リスクの計量化を徹底的に追究し、総合リスク管理の概念化の設計に挑戦する。さらに羽原 敬二論文では、地球的規模のいわばグローバルな視点からのマクロリスクマネジメントが展開される。それを受けて社会資本やインフラ維持管理、サイバー攻撃管理、資源・エネルギー管理が個別に展開される。読み手を飽きさせない技が次々に披露される。

寄稿論文についてお断りをおこななければならないことがひとつある。それは応募段階での特集名を「今後のリスクマネジメントのあり方」にしておきながら、実際の論文名のなかに、中点（・）がついたままの論文があることである。執筆者を尊重し本人申告のままにしておいた。形式の違いが本質の違いになっていないことを祈る。

一方投稿論文は、寄稿論文5本に比べて3本とやや低調であった。しかし個別には大溝一登論文の今話題の国際金融分野、田中 美和論文の金型産業に特化した産業の実態と方向性、白 旺論文のグローバル戦略それもわが国グローバル企業の中国におけるローカライゼーション戦略と、いずれも分析視点の独自性、話題性に富む内容であった。量を超えるに値する良質内容の論文であった。ここに合計8本の論文が勢揃いした。

学問の世界では、国を超え時代を超え先達から学ぶことができる。しかも死ぬ思いをしなくても学習できる。多様性に富みしかも先進性にあふれた文章を読む冒険（risk）を読者の皆さんと共有しつつ…。

神奈川大学国際経営研究所

所長 海老澤 栄一